

## Interpreter Education at NTID

Rico Peterson 氏

デカロ氏:(講師紹介)ASL IE (American Sign Language and Interpreter Education)の責任者である。このプログラムには二つのコースがある。一つは学生向け、もう一つは教員向けである。

### ・手話通訳に求められるもの

手話通訳にとって必要な質というのがある。例えば、文化や言語に関するスキル、責任感、人間関係(特にろう者との)を保つ力である。文化を知らずに言語獲得は、出来ないし、その逆も言える。これらは技術的側面である。

ここに入学してくる学生は、はじめ、ろう者文化や言語としての手話に関して間違った認識を持って入ってくることが多い。まずは、それを変える事から始める。「手話は簡単に覚えられる」、「ろう者は良い人だ」、「手話を覚えさえすれば手話通訳も出来る」などである。これらの認識違いは、アメリカ特有のものではなく、おそらく世界共通であろう。

### ・学ぶ上での課題

ASL を学ぶ上で最大の課題は、アメリカ人が外国語を学ぶ経験が少ないところにある。例えばスペイン語でもフランス語でも、その言語を獲得の為に、実際にその国に行って学ぶ者に成功者が多い。しかし、『手話の国』は、どこにも無い。NTID には、ろう者がたくさん居て、ここが手話の国に変わるものになるのかもしれないが、ともかくカリキュラムだけでは決して充分ではないことは確かである。魚を捕ろうと思ったら、船に乗って実際に海に出なければならないように、手話も積極的にろう者の中に入って、自ら学び取らなければならない。

しかし、ASL を学ぶ事そのものだけが難しいのではない。第一言語の能力によって、第二言語の習得は、大きく左右される。ASL を学ぶにあたっては、まず母国語である英語力をあげることである。ここでは、それにも非常に力を入れている。通訳をする上で、英語に対する柔軟性は、非常に重要である。

### ・手話通訳とは

さて通訳とは、「言葉と言葉を直訳ではダメ」、「文法の違いを踏まえた通訳」、「発言の意図を捉えた通訳」といった事を踏まえた作業になる。このことを話すと生徒はたいがい驚く。その責任は、初めに話した CD にもあるのかもしれない。CD には、英単語と手話表現を対応させて収録してあるので、英語に一つ一つ当てはめれば良いのだと思われてしまう。だが実際には、全く違う。単語、文法、慣用句は、手話に直すと全く違ったものになる。

発言に隠された意味をとらえた通訳が必要になる。日本手話通訳にも同じ事が言えるのではないかと思う。

例として「May I help you?」を挙げる。「何かお手伝いしましょうか?」といった意味である。この表現は、幅広い意味を持ち、英語では同じ表現で事足りても、手話にすると大きく変わる。例えば、落ちているものを拾う時には『/want/me/help/you/want/?/あなたが落としたの?拾おうか?』となる。大学などの講義中に教員から言われたら『/two/of/you/finish/話を終わらせなさい(私語は慎みなさい)』となる。病院に行って医者から言われた時は『/you/here/for/for/?/どうしました?どんな症状なのですか?』となる。英語に対応させた『May/I/help/you?』の表現だけ(対応手話)では伝えられないのである。CDによって、間違っただけでよいと思ってしまう生徒も居る。そこで私達は、英語の考え方と手話を切り離すよう強調している。

## ・手話通訳のニーズ

アメリカでは、手話通訳の75%が教育場面で行われるため、必然的に私達は通訳養成のニーズを満たさなければならない。NTIDで情報保障開始以来、通訳者不足が明らかになり、手話通訳者をいくらかでも育てなければならない状況になった。1968年にNTIDで教育場面の手話通訳養成を開始したが、当時としては他に例の無いことだった。ただ、教育現場だけでなく、医療・法廷・企業・政治場面でも手話通訳は必要になる。元々は講義通訳を育てる為に養成を開始したが、今ではそういった教育場面以外の通訳も養成するようになった。

## ・通訳養成プログラムの概要

通訳養成プログラム(ASL 1E)のセクションは3つあり、まず、一つ目はデフ・スタディ、これは必修で社会人(夜間)コースにもある。二つ目は教職員向けの手話指導である。ご存知の通り、ここの職員は皆手話を学ばなければならない。つまり私達には、指導する責任もある。そして3つ目が手話通訳のコースである。2年間の準学士をとった後、同じく2年間で学士をとることもできる。他の大学で、通訳コースを受けて戻ってくる学生も居る。NTIDの手話通訳養成の教員は、他大学に比べ、フルタイム契約の教職員が最も多く(他大学ではパート契約が多い)また、手話通訳資格を持ち、さらに現役の手話通訳者として活動している者が採用される。NTIDでは、聞こえる専門家がろう者に関われるフィールドを提供するよう心がけている。ここには、多くのろう学生や100人以上のろう教職員が居る事が利点なのである。年間カレンダーを見てほしい。クォーター制度がある。コースアップには良いが言語習得にはよくない。資料には無いが、夏学期にもASL習得のコースを実施している。学士取得には2年間で90単位を取る必要がある。またその前には、準学士が必要であるが、それは、NTID以外でとったものでも構わない。手話通訳トレーニングコースの前には、中間レベル(ASL 4)の手話技術を持っていないと行かない。また、異文化コミュニケーション、通訳に関する導入、読み書き、文学も必須科目である(読み書き・文学はRITでも必修である)。冬学期にはASL 5をとる。ASLの構造に関して学ぶ。そして

春学期には ASL 6 をとる。この辺りで、通訳についての基本的なことも学び始める。2 年目は、手話のコースは無い。ろうコミュニティーで、それぞれ手話を学ぶ事になる。1 学期には春学期に続いて手話と英語の翻訳という第 2 レベルに進む。

Q 松崎：『ろうコミュニティー』を具体的に教えてほしい。

A : これはあくまでもカリキュラムではなく、ろうコミュニティーの中で交流するよう促すということ。例えば、ろう者が働く職場やろう者の交流会、ろう学校に行かせたり、デフクラブ（ろう者が集まるバー）でウェイターをさせたり、RIT 内のサークルでチューターをさせたりする。学生の立場でなく、個人として生の状態を体験させ、ろう者が求めているものは何かを現場で感じ取ることが目的である。また、ろう者から手話を教わる代わりに、ろうコミュニティーになにかを返すというような、ろう者と自分とのギブアンドテイクの関係も体験させる。他大学では 1 年目にやっているようだが、ここではあえて手話能力がある程度ついた 2 年目になってから促す。

最後の春学期にプラティカムというのがある。これは、実際に外部で通訳経験をさせる。決して 1 人でさせず、あくまでも先輩と共に働く事になる。主に、RIT や幼稚園から高校までの教育現場での通訳が多い。医療現場に行く事も稀にある。フリーランスで働く人も居る。

3 年次ではより専門的分野の通訳に関する内容となる。4 年次では 1 学期まるごと通訳現場に出て働く、この場合も 1 人ではなく、必ず誰かしらの管理下で働く事となる。

何か他に質問は？

Q 菊池：ASL 習得前の教員の扱いは？

A : ここの方針として新任教員で手話を知らない方には、1 年間はみっちり勉強して頂くことになる。その 1 年目の 1 学期は講義を持つことは出来ない。2 学期は他の授業を見学はできるようになり、3 学期になってやっと授業が出来る。実際には、ほとんどの教員は配属された時に既に手話が出来た。なぜなら、ほとんどの教員が卒業生であり、ろう者であるからである。まさにここにふさわしい人材なのである。

Q 岩田：実務経験をカリキュラムに入れているが、その評価方法は？

A : 評価方法は様々ある。まず評価票を先輩がチェック、養成の教員も現場を実際に見て評価、さらに生徒が自身でも評価を行う。これらを総合して評価される。